



王桜中だより

第11号 令和6年2月

北区立王子桜中学校
校長 吉原 健

失ったものを数えない…

校長 吉原 健



さる1月12日(金)に東京都教育委員会の事業である「笑顔と学びの体験活動プロジェクト」の一環として、車いすバスケットで活躍されているパラリンピアンの上村知佳さんと、車いすバスケット、車いすソフトボールで活躍されている福島正さんを講師にお招きして、車いすバスケットの体験交流会と講演会が行われました。上村さんはパラリンピックに5大会連続出場している選手で、シドニーパラリンピックでは銅メダルを獲得されています。

上村さんのお話では、車いすバスケットが障害者スポーツとして取り入れられた当初、車いす同士の激しい衝突で選手のケガが頻発した時に、「車いすバスケットは危ないからやるべきではない…」という議論もあったが、そうではなく、どうしたら競技用の車いすをより安全安心なものに改良できるかを関係者の方たちが真摯に突き詰めてきたそうです。「危険なもの、不安なものは取り除いてしまう…」という発想ではなく、みんながより安全に楽しめるための工夫や努力を続けるという考えにはとても共感をもってお聞きしました。

そして私が強く心を動かされたのは、上村さんのお母さんの存在です。我が娘が学校時代にバスケットボールで個人賞を何度も獲得してきても、『天狗にならないように…』とあえて厳しく娘を戒めてきたこと、上村さんが事故で車いすになり絶望の淵に沈んでいた時に、視点や生き方を変える声かけをしてくれたこと、さらに車いすの人に対する社会の差別的な眼差しに上村さんが傷付いたときも『あなたが外に出ないと、世の中は決して変わらない…』と強く背中を押してくれたことをエピソードとして語っていただきました。厳しいながらも我が子に対して、心からの愛情をかけ続けるお母さんの姿は立派だと思いました。



上村さんのお話の中で、「パラリンピックの精神」を最も端的に表している言葉として、最後に『失ったものを数えるな 残されたものを最大限生かせ』という言葉をお聞きいただきました。今学校の勉強や部活動などに悩んでいる生徒にとっても、私たち教職員にとっても、物事をネガティブにとらえるのではなく、自分にできることや自分に与えられた環境の中で、精一杯チャレンジしていくことの価値をお聞きいただきました。

2月の行事予定

日	曜日	2月行事予定	日	曜日	2月行事予定
1	木	職員会議	15	木	SHS 訪問 校内研修会 部活再登校
2	金	都立高校推薦入試合格発表	16	金	学校保健委員会 数学検定
3	土	土曜授業⑩	19	月	生徒会朝礼 定期考査一週間前
5	月	全校朝礼・安全指導	20	火	東京都教育研究員研究授業
6	火	北区教育研究会(午前授業) 定時退勤日	21	水	都立高校一般入試
7	水	北区教育研究会(午前授業) 定時退勤日	23	金	天皇誕生日
9	金	2年校外学習	26	月	定期考査IV
10	土	(都内私立高校一般入試)	27	火	定期考査IV 午後採点日(部活動なし)
13	火	あいさつ強化週間始 専門委員会	28	水	午後採点日(部活動なし)
14	水	職員会議	29	木	答案返却開始

心のエネルギーを補充する



能登半島地震での被災地の状況が連日報道されています。崩れた家や通行不能になった道路、厳しい寒さの中の避難所での様子など、「本当に気の毒に」と心を痛めたり、「何かしてあげたいと思いつながら何もできない」自分に不甲斐なさを感じたりもします。

先日、新聞記事の中で、精神科医の香山リカさんは、こうした大きな災害などの中で自分までもが疲れを感じたり、気持ちが落ち込んだり、イライラしてきたりする状況を「共感疲労」と呼んでいました。大変な状況にある人に気持ちを寄り添わせるあまり、自分までもが心のエネルギーを奪われてしまうことを懸念しています。こうした「共感疲労」の状態



になってしまうのは、むしろやさしくて思いやりのある人なのだといいます。そして香山さんは、「つらい映像や情報からちょっと離れて、ゆっくり休んだり家族や友人との会話を楽しんだりしてほしい、自分の心のエネルギーを補充してあげて欲しい…。いま被災地にいない人も、自分を大切にしたい。自分を守ることが必ず被災者を守るにつながる…」と言い切っています。最近私が読んだ哲学者の岸見一郎さんの著書にこんな一節がありました。『自分ができないことをできないと認め、それを人に言えるのも自立である。できないことについては他者から必要な援助は受けていいし、受けなければならない…。』

人に頼らないことや我慢することが美德であり大人の自立したふるまいかのごとく刷り込まれてきたのが、これまでの日本社会であるとするならば、これからの先行き不透明な社会では、進んでSOSを出していく勇気をもつこと、「困った…」「助けて…」と言える力を備えることが求められるのだと思います。そんなことを生徒たちと考えていきたいです。

参考図書：「つながらない覚悟(岸見一郎)」PHP新書

王桜生が創り上げる「自主」



1月22日(月)は年明け初めての生徒会朝礼が行われました。

昨年「意見箱」に寄せられた様々な意見や要望に対して、生徒会役員が時間をかけて話し合い、その結果を校長や先生たちとも相談して一つ一つの意見に対する「回答」を伝えました。

王桜中のリーダーの生徒会が「生の言葉」で全校生徒に直接メッセージを届けるこうした場はとても意味があると思いました。

「意見箱」が形式的なものでなく、王桜生の声を吸い上げるツールとして機能していることが全校生徒に伝わったと思います。

長年の生徒の皆さんの要望であった「冷水機」の増設に関しては、予算を伴うものでしたが、昨今の熱中症予防の必要性も追い風となり、事務室と連携し早期に実現できることになりました。後半は、1,2年生全員が書いた3年生に対する手作りの「受験激励メッセージ」が披露されました。今までは全校生徒に披露する場がなかったのですが、昨年からできた生徒会朝礼の場で見える化できたことは嬉しかったです。「受験」は1,2年生にとっては無関係なのではなく、1,2年生も教職員も含め学校全体で乗り越えていくことが大切だと思っています。



生徒会朝礼に続いて行われた安全指導では、担当教員から「地震発生時の避難行動について」

改めて話をしました。連日被災地の過酷な避難生活の様子が報道されていたり、同世代である中学生の集団避難のことが話題になっているためか、生徒の皆さんは「自分事」として真剣に聞いていました。今防災の拠点としての学校の役割として、中学生は守られる立場だけではなく、小さい子や高齢者の方などを助けたり支えたりする役割を期待されています。そう考えると防災教育の重要性が改めて問われています。あらゆる状況や場面を想定した避難訓練だけでなく、学校避難所が開設されたときの役割分担も含めて防災教育の見直しが必要になっています。ぜひ次年度の重要課題の一つとして地域の方たちと連携して防災教育の充実に取り組んでいきたいと考えています。

